

献 辞

経営学部教授 今 木 秀 和

中田信正先生は、2001年度末をもって定年で退任されます。就任されたのが開学の年度の2月15日（1960年2月15日）とのことですので、実に開学以来の本学の歩みとともに先生の大半の人生の歩みがあったことになります。桃山学院大学の開学以来の歴史を知悉されている先生の退任は、いま本学が歴史の一つの区切りを迎えているとの感慨を催すものです。

本学は、キャンパスの場所からみると昭和町、登美丘、和泉という3つの時期に区分されますが、私はこれを三段跳びに譬えてホップ、ステップ、ジャンプと言っています。いうまでもなくこの力強い3つのステップを通じて本学がいままで発展してきたことを言いたいのですが、先生はその3つのステップをすべて大学内部の人間として自ら体験してこられたのです。本学の校風、伝統の形成に一員として参与され、教育的、学問的実績の蓄積に多大の貢献をなさって、いま退任を迎えようとされています。高浜虚子に「去年今年（こぞことし）貫く棒の如きもの」という句がありますが、この3つのステップを貫く「棒の如き存在」が開学以来の諸先生であったと思っています。中田先生がその有力なお一人であることは衆目の一致するところであります。中田先生の退任に本学の歴史の一つの区切りを痛感する所以です。

私が中田先生に初めてお目にかかったのは、私が本学に赴任してからです。既にご著書を公刊されていましてからお名前は存じておりましたし、私の大学院時代の師匠からも先生のことを聴いていましたので、先生の研究室で初めてお目にかかったとき、旧知の人に会ったように感じました。温和で、穏やかなお人柄であることがすぐ判りました。その先生にその後まもなくたい

へん無駄なことを相談したことを憶えております。本学に赴任してまだ何もわからないうちに大学教員組合から組合への加入の勧誘を受けましたが、組合については前の勤務校でいやな経験をしたことがありますので、どのようにすべきか迷っていたのです。しかし思い切って中田先生に「この大学の組合はどのような組合ですか」とお尋ねしたのです。先生から「皆さん和気藹々とやっていますよ」との返事を得て、安堵して参加した次第です。これが中田先生との出会いの最初の記憶の一コマです。

その後大学院時代の師匠の紹介で、ある研究会に参加することになりましたが、中田先生がその会の有力メンバーとして熱心に研究されている姿に接することになりました。先生はよく研究発表されるのですが、ご自身の発表でない時、他の人の研究発表に実に的確な意見をお述べになる。若い研究者に対してアドバイスするときは、その人の良いところを引き出すように言われる。温和で、穏やかに話されて、まず良い所を評価し、そのうえでその問題点、改善すべき所、課題などを指摘される。語気鋭く、相手をやり込めるという姿勢ではなく、あくまで相手の良い所を伸ばしてやろうとする心くばりに満ちて、ソフトに穏やかに話される。この先生は、本質は教育者なのだと何度思ったか知れません。そしてその後大学で先生がご自身のゼミの学生を指導されているのを見聞きするにつけ、この思いは一層強くなりました。参加を認められたゼミ生には春の休暇中に簿記の宿題を必ずお出しになる。ゼミ生への指導は行き届いていて、学内で開催される学生研究発表大会にはゼミナールとして積極的に参加される。学生懸賞論文に先生の多くのゼミ生が応募し、優秀賞や佳作をとる。そして毎年必ずゼミの卒論集を出される。私は毎年その卒論集を頂戴しているので、先生ご自身がお書きになったその卒論集の「序文」を通じて先生のゼミの様子、活動、実績がよくわかる。全く頭が下がる思いで、尊敬に値する。

しかし先生は、本質は研究者なのだったことも一度や二度ではありません。先程触れた学生の卒論集には必ず「序文」がついていますが、その中に先生のこの一年間の業績の一覧が掲載されています。先生は「私の研究に

対する自己評価の意味をもつもの」と書いておられますが、驚いたことにその業績一覧が年とともに毎年増え続けています。先生の言によると、「60歳を過ぎてからますます忙しくなって、今年（2002年）は猛烈に忙しい。」先生は加齢とともに売れっ子となり、原稿に追われる生活を強いられているのです。戦後の制度疲労で改革が不可避となっている現下の状況で、先生が長年積み重ねてこられた研究がいま制度改革のなかでたいへん評価されています。その高い評価が先生に多忙を強いているのです。

このことは先生の研究には時代を先駆けた先見性があった何よりの証しであると思っています。アメリカの税務、会計の動向に焦点を合わせつつ、他方会計の国際的動向にも注視しながら先生はご自身の研究を進めてこられた。その営々とした研究の歩みの成果がいま時代の要請とちょうど一致しているのだと認識しております。多忙を極めておられますが、充実した日々であると拝察しております。

桃山学院大学大学院経営学研究科の開設と発展に先生は開設準備委員長・研究科長としてご尽力くださいました。先生の存在とご尽力がなければ経営学研究科の今日はなかったと思っております。厚く感謝申し上げたいと存じます。

先生は健康にも留意され、水泳を好まれます。大変お元気のご様子でとても定年をお迎えになられたとは信じられない気がしております。しかし非情にも定年規定があるのも事実であります。退任されたあと先生がいつまでもご健勝であることを念じて止みません。そしていつまでもわれわれ後進の者をご指導くださることをお願い申し上げたく存じます。後進の者としては先生をはじめ諸先達から受け継いだ「棒の如きもの」を継承し発展させていくことが責務であると自覚しております。